

# 発達障がい児・者の母親の「母親としての自分」と「個人としての自分」のバランスと統合の獲得プロセス：発達生涯的視点からの親支援の検討(平成18年度心理科学研究科修士学位論文要旨)

著者名(日)	北島 由季
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要：J Psychol Sci
巻	2
ページ	150
発行年	2006
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006819/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006819/</a>

発達障がい児・者の母親の「母親としての自分」と「個人としての自分」のバランスと統合の獲得プロセス～発達生涯的視点からの親支援の検討～

北島 由季

〈目的〉

近年、成人期女性の発達研究において、母親であることは、個人としての自分との葛藤を生じさせる発達の危機として捉えられ、ケア役割とのバランスの重要性が論じられているが、障がい児・者の母親に関する従来の研究は、母親役割へのコミットメントを強調し、かつ、ライフサイクル全体への視点が欠如している。本研究では、障がい児・者の母親が各ライフステージにおいて有する母親役割と個人としての自分のバランス状態、また、その変化のプロセスを分析することにより、バランスの獲得を可能とし、心理的well-beingに寄与する心理的支援を検討した。

〈方法〉

対象者：幼児期・学齢期・成人期の発達障がいをもつ子どもの母親17名。①半構造化面接を行い、ライフストーリーを語ってもらい、逐語文字化し、分析資料とした。②母・妻・個人としての自分を3つの円で表現してもらった描画（以下「自己図」とする）。

〈結果〉

①発話傾向からのクラスター分析：ライフストーリーの〈過去〉〈現在〉〈未来〉について、発話ごとに母・個人のバランスの3つのカテゴリーにコーディングし、それぞれの総発話数に占める割合によって、クラスター分析を行った結果、ライフステージに規定される傾向が見出され、母親役割は、幼児期には拡大するが、ライフステージの進行に伴い、学齢期以降、縮小されていき、母親役割から個人へという見通しは、学齢後期以降より明確となることが示された。②「自己図」の描画パターンの分析：幼児期は、「母最大パターン」が特徴的であり、母親役割の拡大と個人の縮小、

見通しの乏しさに特徴づけられ、発話傾向と一致するが、他のライフステージでは、発話傾向と矛盾するパターンも少なくなく、母としての自分の大きさは、より意識的なものとして意味づけられていた。③テキストデータ解析：テキスト型データ解析ソフトを用いて、言葉の使用頻度から発話の内容分析を行い、各ライフステージの経験の特徴と支援に必要な要素が探索的に抽出された。

〈考察〉

発話傾向は、実際に、何を、どれだけ担っているかという「実際の母親役割」を反映し、描画は、意識的にどれだけ母親役割に比重を置いているかという「意識的母親役割」を反映していることが考えられ、前者は、ライフステージに伴い縮小されていく傾向を持つが、後者は、ライフステージの移行によっても縮小されていきにくく、個別性により強く規定される傾向があるため、その要因を検討する必要がある。また、ライフステージに応じた母・個人のバランスの実現が保障され、意識的にも、母親役割だけでない個人としての主体的・能動的な生き方をサポートする視点の重要性が示唆された。支援としては、母親役割を無期限化せず、縮小していけるように、初期の母親のケア役割を補完する支援から、徐々に子ども個人へのサービスへの移行が有効であると考えられた。

〈主な文献〉

徳田治子(2002). 母親になることによる獲得と喪失：生涯発達の視点から. 家庭教育研究所紀要, 24, 110-120.